

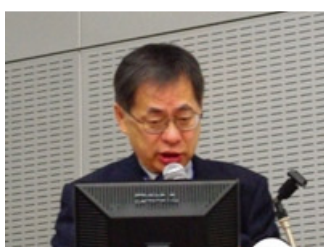
第 24 回日本老年泌尿器科学会（2011 年 5 月 28 日～29 日）

一般口演

尿道カテーテル、感染より閉塞重視

使用するカテーテル工夫して患者の QOL 改善を

2011 年 6 月 10 日 星良孝(m3.com 編集部) カテゴリ: 一般内科疾患・腎・泌尿器疾患・感染症



石井クリニック(さいたま市)理事長の石井泰憲氏は、5 月 28 日の一般口演で尿道留置カテーテルの管理について講演し、「尿道留置カテーテルでは感染よりも閉塞に注意すべき」と対策について説明。さらに、尿路留置カテーテルを巡る課題を挙げながら、医療者や患者、介護職員が知っておくべき知識などについて説明した。

[第 24 回 日本老年泌尿器科学会](#)

感染と結石による尿道の閉塞が、臨床上の問題として双壁をなしている。「尿路感染症はカテーテルを入れている限り防ぐことは難しい」と石井氏は述べる。結石による閉塞も頻発し、予防

が困難。結石は、尿中のたんぱく質由来の尿素を細菌が分解。発生したアンモニアが元になり結晶化したものだ。

尿路感染について、石井氏は、「過敏になる必要はない」と説明する。理由の一つは、カテーテルに細菌が入っても、膀胱の粘膜で防御機構が作用するため、感染は容易には成立しないため。抗菌薬で細菌を抑制しようとしても、「バイオフィルム」のために効果が見込みづらい。バイオフィルムは、細菌が菌体の周囲に形成するもの。抗菌薬投与は、発熱の場合に限り行くと石井氏は説明する。

尿中の結石による閉塞への対応こそ重要というのが石井氏の考え方。結石が生じやすい状態の患者は pH で調べるとアルカリ性になっている。石井氏が有効と強調するのは、クランベリージュースの飲用。尿の pH が 7 程度に下がり、利尿作用があり、バイオフィルムの生成を防ぐために結石予防に効果がある。そのほか水分摂取やビタミン C も有効。

尿路留置カテーテルの留置で、腎機能悪化の懸念はあまり問題視する必要はないと石井氏を見る。石井氏が 22.3 カ月尿路

留置カテーテルを留置する症例 162 人のデータを検討したところ、悪化するの約 3%にとどまった。不変が半数。25%程度は閉塞が改善されて、腎機能が改善していた。

患者の不安を解くには？

患者の不安や不満を解いていくことも重要になる。不安や不満として多いのは、外出時の不安、入浴、性生活、抜去の不安などで、違和感や疼痛に関するものもある。

外出時の不安に対しては、患者には携帯用の蓄尿バッグを利用してもらうほか、膀胱機能が正常に近い患者には、蓄尿時にふたをできるキャップ付きのカテーテルが有効という。健常者と同様に排尿時にふたを開ければよく、感染の心配も少ない。夜間多尿の患者では、昼間は自己導尿のカテーテルを付けて、夜間はナイトバルーンカテーテルに付け替えてもらえば、夜間に起床しなくて済む。

石井氏は、「カテーテルの交換時期、ADL の考慮などが重要な事項。間欠的自己導尿ができず、長期間にわたってカテーテル抜去できない患者が存在するのも現状。QOL の向上には、

昼間のカテーテルキャップの使用や携帯用蓄尿バック、夜間のナイトバルーンカテーテルをもっと普及させるべき」と説明する。

また、カテーテルの内腔閉鎖しやすい症例は、頻繁にカテーテルを交換する必要がある。径の太いカテーテルを利用するのは、血塊や結晶などの付着でカテーテル内腔の閉塞を繰り返す場合に有用となる。

患者や家族に対して、在宅医療に関する知識を付けていくことも不安解消に重要。例えば、バルーンに尿が浸透するために固定水が黄色に変色するケースがあるが、正常反応で問題はない。尿中のインジカンが細菌により分解されて尿バッグが紫色に変色するケース(紫バック症候群)も問題ない。外尿道口の後方で起きる断裂化なども心配は不要。

免疫が低下している症例は性器ヘルペスが活性化され、ヘルペス感染での外尿道口のビラン、疼痛もあるので、医療者や介護者の手袋装着が必須となる。

石井氏は、「感染よりも閉塞に注目し、QOL改善を重視して、健常者に近い日常生活を送れるようにする。尿道留置カテーテルについての正しい知識と理解を広げることも重要」と話す。

- ・ [資料共有ひろばβ](#) **学会特集**
- ・ [第24回 日本老年泌尿器科学会](#)